

■ 研究ノート ■

# 日本手話と日本語のバイモーダル児の手話 (手指モダリティー) 使用 ー2歳2ヶ月の幼児に関するケーススタディーー

平 英 司

(関西学院大学言語コミュニケーション文化研究科研究科研究員)

## 1. 研究の背景

### 1.1. バイモーダル児の誕生と本研究の重要性について

ろう児の人権救済申立にも見られるように、近年になりろう児の養育に日本手話<sup>1)</sup>を用いる聞こえる親の家庭が出現し始めた。このような家庭は日本語と日本手話のバイリンガル家庭と言えるが、家庭に聞こえる子ども（ろう児の兄弟姉妹）がいる場合、その子は日本手話と日本語のバイリンガル環境で育つこととなる。日本手話と日本語のバイリンガル児の場合、手指（身体）と音声という異なるモダリティー（＝言語表出様式）を用いて言語使用を行っている。そのため、2つの言語を有するバイリンガル児であるとともに2つのモダリティーを有するバイモーダル児でもあると言える。本稿では、日本手話と日本語のバイリンガル児を音声言語同士のバイリンガル児と区別するために、バイモーダル児と呼ぶ。親は「ろう児にとって日本手話が必要不可欠である」という確信のもと家庭に日本手話を導入したわけだが、聞こえる子どもにとってどのような影響があるのかについては必ずしも確信が持てているわけではない（平 2014）。主たるモダリティーの異なる2つの言語におけるバイリンガル環境では、どのような言語使用が行われるのであろうか。バイモーダル児の言語使用をみていくことは、今後ろう児と聴児をもつ家庭が家庭の言語のあり方を検討する際に参考になるであろう。バイモーダル児の言語使用を対象とした研究は、ろう児と聴児をもつ家庭が今後の言語方針を検討するうえでも重要な試みである。

本研究では、幼児であるバイモーダル児の言語使用、特にバイモーダル児の特徴である手指使用に焦点を置き、分析を進める。

### 1.2. 先行研究と研究課題

今まで、幼児の手話使用について先行研究では、どのような研究が行われてきたのであろうか。

---

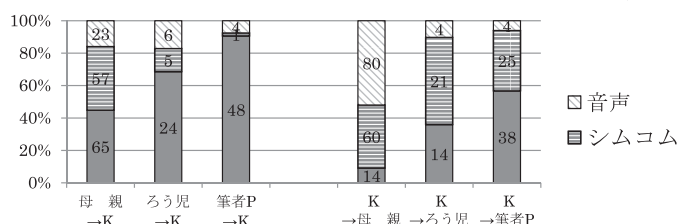
1) 日本手話は日本語とは異なる言語体系（文法構造）をもつ（市田 2005, 岡・赤堀 2011 他）そのため、音声で日本語を話しながら同時に手指を用いて表現することは困難である。日本語を話しながら日本語の語順で手話単語を並べていくものを日本語対応手話（手指日本語）と呼び、日本手話とは区別される（木村 2011 他）。

まず、手話環境にある幼児の手話表現について、言語獲得の観点からの研究がある。ろうの親をもち手話環境にあるろう児が、手話を獲得（習得）する過程で、手話喃語や手話の幼児語がみられることが報告されている（鳥越 1997 武居 2008 ほか）。手話は、手の動き、手の位置、手の形や向きにより構成され、それらは音韻的な要素とされている。ろう児の場合、その要素が単純なものとなるという。例えば、手型について言えば幼児は細かな手指での表現が難しいため、グー型、1 型（もしくはチョキ型）、パー型といった手の形になる。また、Newport（1988）はろう児の幼児手話を分析し、ろう児が手話の要素を音韻的に分解し、個別に獲得していく事を述べている。そのため、手の位置は大人の手話と同じであるが形が単純化していたり、手の形が大人の手話のように表せたとしても手の位置が異なっていたりという事が手話の幼児語には見られるとされている。また、ろう児だけではなく、ろう者を親に持つ聞こえる子ども達（コーダ）においても同様の現象がみられることが報告されている（澁谷 2010）。

では、バイモーダル児の場合はどうであろうか。バイモーダル児の場合、親は聴者であり生活の大部分は音声言語の環境に身をおいている。手話を使用するのは兄弟姉妹であるろう児がその場にいる場合が主となる。これは親がろう者である場合とは明らかに異なる言語環境と言える。このような言語環境でも、手話の喃語や幼児語の時期を経ながら手話を身につけていくのであろうか。バイモーダル児の手話の言語獲得についての先行研究は見当たらない。そこで、①本研究では、2 歳 2 ヶ月のバイモーダル児の手話の幼児語（喃語期は過ぎているため）について分析を試みる。

次に、バイモーダル児のモードスイッチに関する研究がある。バイモーダル児は、音声モダリティーのみによる言語表出（音声モード）、手指モダリティーのみによる言語表出（手指モード）さらに音声と手指の同時言語表出（シムコムモード）という 3 つの言語表出モードを有する。そして、この 3 つのモードを切り替え（モードスイッチ）ながら会話を進めることが報告されている。この 3 つのモードはどのような要因で切り替えられているのであろうか。バイモーダル児のモードスイッチの要因の研究としては平（2014）がある。平（2014）は、バイモーダル児 K の手指モード使用の割合が、普段話し相手が K に手指モードで話しかけている割合に、比例していることを明らかにした。そして、モードスイッチと音声言語のバイリンガルのコードスイッチとの類似性を示唆している。

図表 1 話し相手のモード使用と K のモード使用の割合 2010.1～2010.7（K 2：02～2：08）



平（2014）の研究は、インターバル記録法により 10 秒ごとに出現したモードを計上し、K が 3 者に対する使用モードの頻度を比較した量的研究である。実際の会話の中で、相手がバイモーダル児に話しかけたモードがバイモーダル児のモードの選択に影響しているか否かについては、明ら

かにされていない。そこで、②バイモーダル児の手話使用について、話し相手のモードの使用からの影響を分析する。

本研究では、2歳2ヶ月になる日本手話と日本語のバイモーダル児の手話使用に焦点を当て次の2点についてみていくケーススタディーである。

①デフファミリーのろう児等で見られる手話の幼児語が、2歳2ヶ月のバイモーダル児にも見られるのだろうか。見られたとすればどのようなものであろうか。

②バイモーダル児の手話使用へのモードの切り替え（モードスイッチ）には、会話における話し相手の言語使用に影響されるのであろうか。

## 2. 研究対象者と研究方法

本研究の対象となるバイモーダル児 C は2歳2ヶ月（2012年1月生まれ）の男児である。聴者の両親とろう児（2006年1月生まれ）の姉（D）をもつ。D は日本手話を教育言語とするろう学校に通っており、C が日本手話にふれるのは休日や D の帰宅後等、D とともに時間を過ごす場面が主となる。筆者（P）は2013年9月から1～2ヶ月に1回程度訪問し、夕食時の様子を中心に撮影をし、データを収集している（現在継続中）。また、筆者が訪問しなくても母親（M）に撮影を依頼し、データ収集を行っている。今回分析対象とするのは2014年3月（C は2歳2ヶ月）のデータ（斜体）である（図表2）。

父親は残業で不在であり、データは母親（M）、姉（D）、バイモーダル児（C）（それに筆者が訪問時は筆者（P）が加わる）の会話である。

図表2 データ収集日（太字は筆者訪問日）

2013 年度		2014 年度	
9.3	11.8	1.9	2.7
9.10	11.12	1.10	2.14
<b>9.19</b>	11.13	1.13	2.17
10.1	11.21	<b>1.14</b>	<b>2.21</b>
10.8	11.28	1.17	<b>3.7</b>
10.10	12.2	1.20	<b>3.13</b>
<b>10.17</b>	<b>12.5</b>	1.28	<b>3.17</b>
11.5		2.3	<b>3.18</b>

## 3. 結果と考察

### 3.1. 幼児語について

親が聴者であるバイモーダル児 C から手話の幼児語が観察された。C の幼児語もろう児等が示しているものと同様であり、単純な手の動き、手の位置、手の形や向きがみられる。次頁に示したものの以外にも／かまわない（通常は小指→人差し指）／、／だめ（通常は親指→人差し指）／などの幼児語がみられた。

〈手話の幼児語〉



〈成人の手話〉



／牛乳／

こめかみの辺りで表現されるものが、頬の辺りで表現されている。手型も大人の手話とは異なっている。また、パー手型での表現もみられた。



／お酒／

通常、手型2のところ、Cはグー手型で表現している。動きも下から上だが、上下に動かしている。Cの場合、上に動かした手を下に下す動きも手話単語の動きとなっている。



／ワイン／

手型Wのところを、Cはパー手型で表現している。動きも○ではなく横方向に接触の動きを見せている。



／リング／

グー手型を頬に持っていった後、胸の前でぐるっと回す。

(モデル：小北悦子 関西学院大学「日本手話」非常勤講師)

## 考察


ろう者を親に持つろう児やコーダに比し、手話の入力の少ないバイモーダル児Cにおいても手話を習得する過程で、手話の幼児語が観察された。観察された手話の幼児語は、手の形や動きなどが単純化されており、ろう児やコーダの幼児語と類似している。また、／リング／の幼児語では、初めに頬でグー手型をした後、胸の前の空間で動きを付けている。これは、ろう児の手話習得（獲得）の分析を行った Newport (1998) が指摘した、「手話を習得する過程で、子どもが手話の音韻要素である手の位置、動き、形や向きを分離して覚えていく」という仮説を支持するものであった。


## 3.2. モードスイッチについて

2014年3月7日から3月18日の4回のデータにおいて観察されたCのモードスイッチ場面は以下の通りである。

発話例1	C(2歳2ヶ月) 2014.3.7 (データ番号: K 20140307020516)
〈状況〉母親がリモコンをいじるCに対し、壊れるのもう触らないでと注意をし、Cがそれに応じてリモコンをいじるのをやめる。	

発話番号 話者→相手	モダリティー	発話内容 ( ) は身振りや注釈、* は理解不明な発話、[ ] は同時発話
1 M→C	音声	壊れちゃうからカチカチしないで だめ
	手指	(トントン) 終わり
2 C→M	音声	ピッ
	手指	終わり (電源を押す)

発話例 2	C (2 歳 2 ヶ月) 2014.3.18 (データ番号: K 20140318010249)	
<p>〈状況〉 バイモーダル児 C が姉が紙コップで作った工作を見て感心するとともに、紙コップでできていることを P にきいている。</p> 		
発話番号 話者→相手	モダリティー	発話内容 ( ) は身振りや注釈、* は理解不明な発話、[ ] は同時発話
1 C→P	音声	お～ ぐ～い～(すごい～)
	手指	指差し。
2 C→P	音声	[D] ちゃん作ったの? ここ **てる?
	手指	(左手で持ち指さしながら)
3 C→P	音声	これ? ここ これ?
	手指	指差し コップ (飲む仕草) 指差し
4 P→C	音声	そうそう、コップ ***
	手指	手指
5 C→P	音声	コップ? ♪***♪ (歌う: 内容不明)
	手指	

発話例 3	C (2 歳 2 ヶ月) 2014.3.18 (データ番号 : K 20140318020012)	
<p>〈状況〉</p> <p>テーブルにあったポットから筆者 (P) が紅茶を入れているのを見て、バイモーダル児 C が「熱い?」とたずねている。</p>		
		
発話番号 話者→相手	モダリティ	発話内容 ( ) は身振りや注釈、* は理解不明な発話、[ ] は同時発話
1 C→P	音声	あっちっち?
	手指	(テーブルを触りながら)
2 P→C	音声	
	手指	(ポットを触ってみる)
3 C→P	音声	あっちっち?
	手指	

4 P→C	音声	
	手指	大丈夫
5 C→P	音声	あっちっち これ
	手指	熱い 指差し
6 D→P	音声	
	手指	何？
7 P→D	音声	
	手指	熱いの？って 大丈夫だよ。 D（ポット触ってみる）
8 P→D	音声	
	手指	温かい
9 C→P	音声	熱い
	手指	（ポット触る）熱い

発話例 4	C（2歳2ヶ月）2014.3.18（データ番号：K 20140318020012）	
〈状況〉筆者 P が牛乳を飲み、D（姉ろう児）がバイモータル児 C に牛乳を入れてあげている。		
発話番号 話者→相手	モダリティー	発話内容 ( ) は身振りや注釈、* は理解不明な発話、[ ] は同時発話
1 C→P	音声	牛乳？
	手指	指差し P（うなずき）
2 C→P	音声	牛乳 紅茶？
	手指	指差し 紅茶？
3 D→C	音声	
	手指	何？ どっち？こっち？
4 C→D	音声	牛乳（小声）
	手指	指差し 牛乳 D（牛乳を入れる）
5 C→D	音声	
	手指	ありがとう
6 C→M	音声	（母親登場）[C の。。 これ、C の。
	手指	
7 P→C	音声	
	手指	[(ねえ) これ何？ (ねえ) これ何？
8 C→P	音声	
	手指	牛乳
9 D→C	音声	
	手指	牛乳。何？牛乳ほしい？
10 C→D	音声	
	手指	指差し
11 M→C	音声	
	手指	そうそう 牛乳

発話例 5	C（2 歳 2 ヶ月）2014.3.18（データ番号：K 201403180105130）
〈状況〉C、P、D の三者がいる場面で、絵本を見始めるが途中で D が別の作業をし始める。	

発話番号 話者→相手	モダリティー	発話内容 ( ) は身振りや注釈、*は理解不明な発話、[ ] は同時発話
1 C→P	音声	これ キリンさん
	手指	指差し キリン
2 P→C	音声	
	手指	指差し
3 C→P	音声	ゾウさん
	手指	ぞう
4 P→C	音声	これは
	手指	指差し
5 C→P	音声	キリンさん
	手指	

### 考察

モードスイッチが5つの会話場面で観察されたが、発話例1を除く4つのモードスイッチの発話例は3月18日に見られている。3月18日は筆者Pが訪問している日であり、モードスイッチが起きている場面には筆者Pが存在している。Pのいない日では、母親Mが食事の準備をしている間はろう児Dとバイモーダル児Cが二人で手話で会話をしていたり、食事中にはMとDが手話で会話をしていることも多く、バイモーダル児Cがバイモーダル話者であるMと手話で会話することも少ない。しかし、Pがいる場面ではMが食事の準備をしている間やMとDが話している間にもバイモーダル話者であるPとCで会話をすることがあり、比較的多くモードスイッチがみられたと考えられる。

発話例1は、文間モードスイッチではあるが、母親Mの手話による表現を、そのまま模倣している。母親Mとバイモーダル児Cとの音声による会話の中に、手指モードのやりとりが挿入されているような状況である。ここでは、まず母親Mが音声での発言の後に／終わり／と手指モードにモードスイッチをしている。音声日本語の「だめ」と日本手話の／終わり／は同様の意味を表しており、同じ内容を異なる言語で繰り返すことにより、強調しているとも考えられる。一方、バイモーダル児Cは、それを受け母親の／終わり／の発言をそのまま模倣している。Cが／終わり／の意味を理解していたのかは不明である。Cは母親Mの「ダメ」という発言より発話の意図を理解し、／終わり／の意味を理解したのかも知れない。バイモーダル児が日本手話を習得する過程での現象とも考えられる。

発話例2は、文内モードスイッチの例である。音声言語のバイリンガル児の場合、一方の言語で表現が見つからない場合、他方の言語で言い換えることがある。この事例では「コップ」という日本語の代わりに手話で／コップ／と表現しているという面で、音声言語のバイリンガルとの類似性を見出すことができる。一方、／コップ／という手話とともに同時に日本語で「ここ」という発話をしている。このような同時に発話ができるというのはバイモーダル児の特徴と言える。

発話例3、4で見られるモードスイッチは、Cにどのモードで話しかけたのかが影響して起きていると考えられる。発話例3の場合には、それまでCは、Pに音声モードで話しかけていたのだが、Pが手話で話しかけることにより、Cは音声モダリティーに手指モダリティーを付加するシム

コムモードにスイッチしている。発話例4の場合には、話しかける相手がDになっているため話し相手の交替がモードスイッチを引き起こす原因とも考えられる一方、CはPにも手指モードで話しかけるようになっており、(話しかけた相手に関係なく)手指モードでの話しかけがCのモードスイッチに影響しているとも考えられる。手指モードでの話しかけが、音声モードをシムコムにシムコムモードを手指モードへと変化させる。このような相手の手指モードに反応し、同じように手指モダリティーを用いる現象は一種のコンバージェンス (Giles 他 1991) として捉えることができる。

しかし、発話例5では、Pが手指モードからシムコムモードへ切り替えて話しかけた際、Cは音声モードへと切り替えている。

平 (2014) ではバイモーダル児の手指モードの使用は、音声言語同士のバイリンガルにも見られるような話し相手の言語使用の傾向に比例していることが述べられている。一方、音声を伴う音声モードとシムコムモードとでは、相手のモード使用の傾向に関係なく、相手が聞こえるかどうかといった要因がモードの選択に影響していると考えられる。また、手指モダリティーに音声を伴ったシムコムモードと音声を伴わない手指モードとで、形容詞と名詞の現れる語順を比較した平 (2013) では、シムコムモードは形容詞－名詞という日本語の傾向にあり、手指モードでは、名詞－形容詞という日本手話に特徴的な語順となっていることが示されている。これらのことから考えると、音声を伴う音声モード・シムコムモード／音声を伴わない手指モードが、日本語／日本手話という言語の対立に関係していると考えられる (図表3)。

このことから、バイモーダル児Cについても、Pが手指モードを使用する場合にはコンバージェンスし言語の切り替えを行うが、Pが手指モードからシムコムモードへと切り替えた場合には、言語の切り替えを起こさず、日本語コードの中で手指を付けるか付けないかというモードの選択をし、(要因としては、Pが聴者でDが会話から外れたのを意識したからとも考えられるが) 手指を伴わない音声モードを選択したと考えられる。

図表3 モードと言語コードの関係

	音声モード	シムコムモード	手指モード
手指モダリティー	－	＋	
音声モダリティー	＋		－
言語コード	日本語		日本手話

#### 4. 結論

今回、ケーススタディーとして2歳2ヶ月のバイモーダル児Cの言語使用の状況を観察した。手話の幼児語の観察からCは音声言語とともに手話言語でもネイティブと同様の過程を経て言語獲得を行っている事が示唆された。また、モードスイッチにおいても音声言語のバイリンガル話者のコードスイッチと同様の状況がみられた。

筆者はC以外にも数名のバイモーダル児のデータ収集を行い、現在データの整理中である。今後、バイモーダル児の時間経過に伴う言語使用の変化と併せ、他のバイモーダル児との比較の中



で、バイモーダル児の共通した特徴などを抽出していくことも検討中である。さらに、今回は日本語の発達については言及していない。バイモーダル児の日本語の発達についても今後の研究が期待される。

本研究が、ろう児と聴児のいる家庭の言語方針を検討する上で、参考になれば幸いである。

#### 参考文献

- Giles, H., Coupland, J., & Coupland, N. 1991. Accommodation theory : Communication, context, and consequence. In H. Giles, J. Coupland & N. Coupland (Eds), Contexts of accommodation (pp, 1-68). New York : Cambridge University Press.
- 市田泰弘, 2005, 「手話の言語学 (1)～(12)」『月刊言語』第 34 巻第 1 号～12 号, 大修館書店. \*連載記事
- 木村晴美, 2011, 『日本手話と日本語対応手話 (手指日本語)』生活書院.
- Newport, E. L., 1988, Constraints on learning and their role in language acquisition. Language sciences, 10(1), 147-172.
- 岡典栄, 赤堀仁美, 2011, 『日本手話のしくみ』大修館書.
- 澁谷智子, 2010, 「手話と日本語のバイリンガル家庭」BIL 1 研究会第 2 回研究会発表要旨.
- 平英司, 2008, 「日本語-日本手話バイリンガル児の発話内 W コーディングについて」関西学院大学言語コミュニケーション文化研究科修士論文.
- 平英司, 2013, 「日本語-日本手話バイリンガル児のモダリティーと手話のタイプ」『日本手話学会第 39 回大会予稿集』日本手話学会 pp 18-19.
- 平英司, 2014, 「日本手話と日本語のバイリンガル・バイモーダル児の言語使用」『関西学院大学先端社会研究所紀要 11 号』pp 99-109.
- 武居渡, 2001, 「ろう児はいかに手話を獲得するか」『手話コミュニケーション研究』41. pp 4-8.
- 鳥越隆士, 1997, 「手話の獲得」小林春美・佐々木正人 (編)『子どもたちの言語獲得』大修館書店 pp 211-235.